延喜式部日記註釋 二

915.35-Sh49ウ
1200500758505
155
19

始

紫式部日記註釋

二

915.35
Sm49

33.12.25

915.35
SH49

陸軍士官學校圖書之印

紫式部日記 秋二のまき

ひちりくなりぬとて、よろづうちをぶよく つゝしみかせ給ふ。世におとしろき菊の枝をたつまいて、ほゝてまわるいろくうつろひたるとさかなるえとうあるとき、面くにうゑたてたるをあはうとて、まく侍ふ兄をたちたるはしたなおんもしをきぬへきこゝちする所に

しろきとゝいふ花なりゝうゑたてたるをのぞいふ所〳〵にをの張りを所へ

しろきとゝいふ花なりゝうゑたてたる菊の花乃めてたさに、年の来

し老と思きぬへきいさ面くおきしろき菊の花乃めてたさに、年の来

たるをとゝ忘るゝこゝちすとなりけふとは陶淵明ゝ詩に酒能祛百慮

菊為制頽齢とたゞ申たゝ流人乃為をわするとゝふ菊いのとせを

國立圖書館
昭和 24. 3. 29
3

2.023

ふ風ふかせうけ。京東寺にあり。今河海抄にえたる風による風なとんてこ水をうけていへ
るなるへし
なおそ酒してたをふとものすこしとなのあなる斜のなる酒しうはいときくしく
をのそなしうそやをてつまなんせをとすくして酒しめたきとおを
ろきとをえきくにつけてをたくたひひけたるしんひくうこ波をつよ
くてもをくおよそほふなけうしきとのきさるそいとくるしき
これは自のうへをんしうなおやはナトテをう酒していまけうて中せ汝
人ふをけうて和ひの美きをつふをくう。師をくなたてこまけうしの品よ
ときといひてその品ふとものすこしをきとうつふをくに品とうつ詞を上下ふ
たつふきをうをたうこの格古文に侍ありといをふううきくしい侍すに
もどうちをうをにしてはきすこのむとをんへうにひけたるしんい佛
をにはくおもひうたるしんなうおにもうつしんをはひきたうへたと
へんくよろつをすはにとろをあやしうき後にもをおよにしたうひぬ風ん
ふなとををなると同しんををいこしては通せせんなとのんなるへしさんををんん
をを引うのをつよくてをたきとおをしろきことを又安につけてもをのう
くとなうをのうくいおをつうけにしんのすをぬをうふおををにふふおを
ひとにをう
いをいいはをなはおををんしをなんにひひもなしつをとふううをとあけたて
はうちなるあて水をとををおをふをとなけにあるひあるをを風
水ををうのうへとやよをにえん棒をうをたるせをすくして

ゑしもちうを心をやりてあるふとゝゆしと身はいとくるしうなりと祈のびよ
ぬるつゝ法
いそしはナニトゾシテドウゾシテとゆゝにて彼ゝ云なり心びうびうなしい心
（とも心ふふまうせさしそなり）つゝよふうゝハ佛ゑに心びうけなうゝ祈
世中の物おもひにうつゝふをゆへりあけなてそ明きそとつふとをつく
いる物なゝ水をき師うく心ゆハんのうゝにそ除く佛ゑを心なう
うゝは心ふとなけふもてなして世を過しいたくゝ所ゝとゆる云なう
つそれたくゝしとゆふ云こゝもしうさるゝに次の物ふうれも身いれとゝる
しかなうとは此所なうゝうたる世とはんの意とゝるうゝこの心ふこと
なけふもてつけて祈る世をゆふとゆそかうこれ奇不載集冬歌影

しらたとていまうゝふしをは水をさたんを立てい拙云ひなく十分な
るさ酒をいふ物をひよをつゝふふゝれくゝさよう水をれうへ清てにお
ゆへよ祈つゝるとなう
小少物君の心みれこせたる色とうくに物あれたとくゝせはつくりもいきく
又色はまゝうちさわきてなんとてこゝをれたることやゝ生せたりけ
んゝくゝうなりにたるにたちゝういたゝうたるたることせんしに 濃染紙
雲なくなるもゝ色をくゝくゝいふゝのるゝふしなゝん
くゝつんゝとたはこに
ことわりれゝふれ乃色は雲なるあしとなるる袖をゝわく酒はれき
はをくゝくゝにのはハ物面のなゝ又色のけゝくもをなんハ師の文の角の大む

紙の表をうつくしくさとしる文なり。といそれたりてしをれたるくは自のおの
なれは早ういているなれと侯のいそくにようてとみにあるなれいかくれ風
なり。こーをれとふと。後ふ妻しくいてうたちうていこの五月をえてやう
て又いかるの許よう。この歌をたてせたるなり。ゆこしをれたるとくある歌の
ふしなる〳〵しうにめたるい紙のをれほのうなるなり。さて雪なくまた所えく
うのあそれなる文れ今きにもちほされて拾ひになるあちにわうんれう
きくせいうるなりいんあ雪なをと。おれなとーてうをなるさまめ雪おさひ
しく。云たちを添くこれしのふにはるおさをの雪なくうれくうれい。
それはなにをこひしのふることをうんといる云なり。といそれたりこれなり新
勅撰集冬歌にさとにはてはるあしけ日宗武新に雪しけ上東門院小

此はとそれまう。れつーんとこれは文句をれへるなり。はて歌にこーをれ
たるとやうれをなりんとれうれ文句をおうくれ歌めをれへるは。作も
きとれ作をはるとをれをなり。おとうれきを初句はダウリニカナヒタル
ノドヘ云なり。しれは。れをはたるるなれをなり。はるの云道はか
はれたる時雨れをは。れをはたをれて。雪なあれと我のく衣をれひて
をもる袖を。道理にをたうれてをそよれくううく侯をなきとうるれ
さとんへうなり。袖のうをあい侯なるとをとうなり。このをのと。古のうれを
、とて。猶白うくをとをうとて。同集にいれり

龍鶏旨

歌の日あうーしくはうーれなるふ紙とは。はーよせをて。四流にあーーうス。けさ
ゆれいけうをちをれをれてあさやうにうれそ

秋の日とは上に引き書きたるなり。されどうくてい文の
つゞけたるやうなれども、狩さにあるに、そゞ文のおもふさにしたがひてそめ
すちなどを一段ゝゝをつて、又ゝゝに立てて出おせる文法なり。次廣岸に
三尺ばかりあまりて、紅にて、新さを盛げるゑいとうにてしおたち張と
まづゝゝて、狩いさおもちなどを、のゝをながくとうれたると同じとなり。
後にもありて、後こゝを以てりさてこれ狩いたしとさせて四段に係り。
ゝゝ加けきしゆ、湖月秋にはの鷁又作艦。淮南子。龍舟。鷁首。註高誘
云。鷁水鳥也。畫其象。著船首。以禦水患云々。細云。鷁は水を
ふにはするものなり。鷁は風を受てよく行くものなれども、なとゝたた
ゝ浮ようゝてゝかゝむとはきあるべけれ共紅ゐしるなめり

沼垂はたつのとなとまぐあうつきよりゝゝをはしゝゝんつゝにに

このり書は十月十六日なり。日本記畧。寛弘五年十月十六日癸卯。天皇行
幸中宮御所。上東門第。以第二皇子。為親王。左大臣以下。於南廷拜
舞。とゝてたり。百徐抄と同じ

うんたちもれは寒ハにしたれなれはこゝはきれのやうにさとうゝとゆゝ
に内仍のうんのとのくれのゝとに中をくゝもれ行くなるもゝうゝとゝ行へ張
ふとゝさゝ伊

こゝゝさハ中文の四方なり。中とハ論語云。こゝゝさハ仍のやうにゆゝに内
仍幾度は中とはゝうゝとゝ言なり。といそれゝうゝされとはゝうゝにとあるをえ
れはこれり書に中文の四方ゝゝゝゝ内仍幾度の四方にゝりてこの四方に

よ。はきうていきうとくの人ぶ。ぶとい家なるへ。ぶらうにはきうきなり。うくえ
ぶは。中こ。ぶはきうきと。はきてとくへ。ぶふとふたつをくきなり
嗅に。かゐ。衣まあり。ぶ。ぶ。まるよに。うーらけつりをとに
このかゐ。衣。まて。ぶ。ぶかゐ。衣と。同人にや。ぶ。ぶを。脱なる。省けるう。者にて。少
ゐ。衣とのこ。出る。衣とあり。又。師そ。ぶは。嗅。ぶかゐ。衣とあり。ぶをふに。うつ
ー。張れらなる。ー。まのうちちく。ぶ。ぶに。あうつきぶかゐ。衣といひて。よ。ぶと
ころなり。といれ。ぶ。ぶ。まるぶ。望まり中央の四方に。系ぶるなり。うーらけつ
るぶ。髪をとくなり

きんのさいふとをはたけなんと。たゆきさんとはたゆたひて。あふきのいとなほく
ー。ぶをまた人ふ。ぶいたる。まてこなんと。きちぬなるに。ぶ。ぶれ。ぶとをきつけて。ん

拾ときまわるさ。あーーき

上の段。ぶをうひて。きんのさやうてつふとより。まなとは。日たるなるふ。めきの
なり。といひあるなり。たゆたは。ブシャウなり。なほくーは。ナンデモナイにて。よ
ぶつまの。扇なるに。甲ーーて。ぶへるなるへ。きぶ。ぶ。ぶ。まてこなんは。
まてこようーなり。きてこの。衣をとりまてていそ。ぶふ。ぶ。ぶけ。ぶ。ぶんー
たる。扇を。人ふ。まていいつけ。ぶきたるーをり。まに。ぶくなりたるに。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ
まてこぬをきこをひていきとくまてこようーと。ぶちぬなるーをうく。省きて
ぶけるにや。給本。衣。ぶ。ぶ。まぶ。きのぶきを。脱せる。又。ぶ。ぶに。ぶとうの。扇の。ぶと
なほくーきぶ。ぶ。又。ぶーーきのを。人ふ。ぶいつけなきーーとの。衣。ぶとい。ぶ。ぶ。ぶ。
てこ。ぶ。ぶとは。ぶ。ぶ。ぶの。敷の。ぶ。ぶ。西宮記の行事。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。雅楽寮。候

路遥奏楽とゝのへたり。いとをさまる。奥さゝへなり。そのあるていをきてゝ
女房とまれさぶのあーとなり。あーきのきい衍り。所にまゐるの下に。その
を脱せるなり。文のさゝは。はゐるべきなりといきゐるべし
れこしむとゝまる。ふなうくいとたをーろしよるを見れはゝよらやうれ汚る身
れ紙なるゝ。ゝーゝのほゝていとくゝ風しけふうつふしまるなにのとくなる
たるさゝ海ーらいと身のほとうなりあるにいとやすけなしーうしと見る
よるは御裏をれ階のもとになり。そしようのほゝては階より昇りて御裏
を昇するなるなり。なにのはナシ。アとふにて。まりにくるーけをたと
もなりなんとゝ見なり。をーいなにうを張るさとくなるはとくしきな
り。身のほとはゝ作者。実伝をふふこれあたりの文の意はとくしれ方伝

方変のくゝ。ーさまーらいと身のゝ作のうれりゆるにはれるにこれ驚裏てとき
はゝさるいやーさ身のほとはゝうゝうゝすゝ分さ海のゝるーけふやはけ なーと見
るとなり。又れをふにをにのきいなたのことくなるたるさ海ーらいとみてもやー。
れとうゝとくをるたるさ海ーらいとゝとふ見ゝうゝ者ゝてうきて。とく
なるきとふとを二ふまゝうゝをたるゆや　ふる歌中宮による
れ性ろにしれきに北海ーを志つゝれて。これこれひさしのひんうーの海ふれれ 倍
ーさたてたるそしなう一ろへたてはんうにあれなきはふれみなこれつまに。
ことをうけへきて。女房れ白れ事れそーらゝとよう。すたまをすこーり引
あけて。内伝二人れつ。れの日れうきあ。ソうは風そーきすうたうゝ見ををうー
けふうれたるやうなり

あれたるいあるはなる方をいふなるべし つぼねこなるようなたゝ者へるところをん
へり 内侍二人は次ぶ又を居二人なり 髪あげのことゝに出て うゝ名い濃紅
女房をいふ
たゝ衣のなんしれそうしとる あをいろ紅むらをんのうゝきぬ 赤濃 裳 領巾 裙
帯 浮線綾 櫨綾 たれはふちんをようをそうたんにおそうゝきは菊きくれめへ名 皆練 祝りいふれ
なるすゝつきあてなしいさゝそつれてゆるうゝめそをやうにきよけなり
まを以下たゝ衣内侍のようをほひなり 領巾 裙帯 傍やのたゝ書にそたた
り 名をりいを多領はにうほきられなるのきぬの祝りまをいふとあり え
つれてえ申いよりうたそしようきられをゆるなり
衣内侍はをゝしれそこ紅ふ元ひ花めれたうとおうちきむうゝきぬはさに

れふれなゝどとをきやうにをりけなる人れつ酒しけふすそしつみたる花んふ
るゝうゝそけるあふきよりそあてこれを酒しなりとをゆひまはあふちたん 棟 綾
申のれやうにはこよひのたつほとよをそにほひむゝあ酒ふたりゑんをとあてれ
すゝをうくやありゑんと酒てれほ申
をゝしいを垂なり 引垂にそ 叙垂とよに 袍ふつまれとなり紅以下 衣内侍
れさ酒なりさにのにそ左系つ内侍の裳 夜に同 如となりきやふちひ
されなりつみなるいて酒しけふそなたを酒なりんゝしはキゞクチといい
ふゝえこのを酒したりいゆをたるしさ酒の 袍の人のよういを酒うたるよしなり
申の以下十五字解うたしうなるにそれたひたをゝへしむゝをを浄
庚原天皇紀吉野宴にれそしを酒ふに神如天降りて 帝をとひなゝ

と。れ風ぢ絶なとにをさ〻れたるをれをひて出るうさにとゝ
流とは。今せにをゝひなゝ人流とゝあるたあれとゝ皆とるにたるなとなり。
されそとくしく。跡跡なと。引いてゝ所てにあゝになん　内侍はのぞ
を歌かになゝ　さたのにのぞ。歌かに　とてにな
を糸つきゝとつきぐゝしたすさゝてれこゝれとをれこをふとゝきゝく
ゝ次中れそうなとゝとりて内侍につたふ
を糸つきゝを糸府の官人なうつきくゝ。ゝにいづゝきゝくゝ。ゝ。ゝめくを
とのゝきゝと同く武官の車にさひくゝとりてなふ所をゝふう又延
喜近衛式に。凡供奉行幸。大将以下。少将以上。幸遠著摺衣幸近脇時處分並着
皂綾横刀弓箭行騰草鞋幸近除行騰著靴将監以下。府生以上並着皂

綾布衫白布帯横刀弓箭行騰麻鞋幸近以蒲脛巾代行騰延衛皂綾青
摺布衫白布帯横刀弓箭蒲脛巾麻鞋云々とそこなるこれ時衣
弦のさ所をゝきくゝしとつゝふる所えくこそうつしちやはてゝきくゝと
つゝくくしとゝをちうひなるなゝを糸つゝさゝきくゝしたすさゝてゝたゝした
をれこをゝつきくゝしとゝふきそはゝれそにとゝそれたるゝそれそうゝ所ゝ所にを
えなるとゝ同ゝ序叙なゝ。ぞれを。なゝ中ゝなるゝ人とゝそれ。ゝ内侍ふゝ中ゝ人
なるなゝされとゝうそは。文の次ゝ中たるひたるゝをゝれとゝしゝうにたれ。ゝ内
ゝれそうゝとゝふゝるは序叙をとゝたるゝのゝ所をゝそゝくゝいそんとそを
づ出るなゝさそ主ゝて。ゝ位ゝの次ゝを出るゝの文ゝなゝとゝおに出るうと
ゝ

そこの中をえたせは。をゆるされたる人をは。まんのあをいろおうれろのこうこ
きぬに。ぬすう氏。裳。うはきいはれしきたしてすきう氏なり。藻苔。物をたうたう。酒
の中おろ。えひきりをきて。作うし。うちまれしもは。こうこ。ほきゆみちをこ
たをせたるうこと。中を。ほきぬとも。まんのうちなし。文子。れこきう。ほき。葉
苑。をんいろうこうあやこき。葉をこうしは。えをとんをなり
これきて。禁をゆるされたる上腹の。ふをえへり
あやゆるされぬは。まんのれとをくしきいむうんのあをこをこ。ぬたうなと
れあてうきうとは。これあやなり。襲。大海。ほうこのすことのれのこをなや
うにあさくとしてこしよい。腰。奴イ。固。文。うたうんをこ。ほうくそしたううれいこうれ
えへあへにて。わうれいせに

水のこい。大海を。ゆるなり。ぬのあれれのこをなり。あさくい。減こをなり。これうし。
あやゆるされぬ。れとれくしきあ。如房をこき。酒なり
こうこ人は。葉のあへのうこ衣をんをにしたうへは。白くあをきうへをは。
すいこ。一へは。あをこうとあうこへうこ。つきくこうれすこ。中に。白き酒
せたるよ。すへて。こき酒をこ。きのこをとくしこうこ。申。酒にめつ
しこれとうくしきあへきよこをゆ
ゆきこせたることあうこ。ゆをいまてんえへしこそこれをて。若き如房よ
のこ酒をれと。すへてこは。上の上腹ようれとれくしきと。若きと。京に
こたうて。ゆへうとくしいんのれ。れにかしこけ。酒なうおとうくし
はギャウヲンナよりへこうなり

うちとけたる折ハ絵にほなしぬるかたちをうち伏しつゝて見えてうれうれんを
ほそくしてつくろひなほりしれとしゝとしたてたる也女房の色ありきにれと
まほにてとし比ほどの程よなびいとをさき事ちめかみのすくしれところへなりけ
しけるさは分れてこちたきさまさうまへいろしえをたる也
さうれうれの下にかくる也そしき示ほてよう詠したてたる也のやにぱそし
こちたきうれ下に若くなれとはまそ見るへしおところへなりけしきハれと
なびけるうたさうり乃こちたきハ若きうさなりうるまハ式部の自の事ありて
あはさつとひたる女房とよ此老衰のけちめを枕まへいろしえてうれて枕
とほきハよくと見えうれすとなりけちめはカハりメなりとほこちたきありに
けへり

さてはあさきようさ紀ひたひつきはしあやしくハ人のかたちを志なくしく
まくなりてをさてなにとところなめ也
さてはくサウモテハ見てきれより此をとれそとと云意なりあさきようをとうを
いふるて顔を扇にて掩ひたるきれより上つかた此額つきとつふ意なりあ
やしくは奇妙になり志なくしくとは捨不有ち云く志なくしとハ申る
さま有るたりてもとハさうらなり云あそしほてあふるしてあにといふを
まさなしによくきう也を只末摘花にいとまてまや氣れなりるを裝束
にそあやしきかうまへの見ゆるをいふといふなり
うへ中にすられたるとて申るうれるうかうたれなりしめ
うくま有くなる中にすくれてよしと見ゆるうれうかうたるきこ女なしめとなり

うちてようこれ女房ゑにうけてさうゝふ女人はまかりつとひてきゝふなん
し二人余呼ふたりれをうちひの人ひとり
うへの女房おにおのぢんに車あ陪さあるとつゝはうへ人とをなりけると
なりと聞く内裏に女房をてふさて内裏に女房を中宮の事仕をと
勇てるを宮にうけてきゝふとふとうされいうもてうり事の陪うけに
こにをかつつひてきゝふなり。　宮の御ことに
おとのまるとそちらせん左ふのおとゝあけて内侍のすけるすゝれそ
しらとより此づこれそよろしき天かなり
そいろは往来するなり天女といい紫上なすることをうに天女にをたてく
此色流たきれなりよろしきいふの根にを信そにたいうふれとつふ
ほとのとなり淫文に可とといふ　ろろ三字とえたり
九条はあをいろふやなにのむらさんのうゝ衣ちらちんは紫の色れうゝ衣紫は
まれのすゝとなりれをうなひ橘三位あどれろれうゝきぬうゝあやれきなる
紫ちちきそうそきなめ屋ゝとあげたすそらちゝ紫て陪ほにと
そそに
つゝとあけたりは簾をかゝへしもらうれは柱にをゝられなる酒なり。新
やにあとゝろのうゝきぬはとすはろろがう
度ようえいたきまう給ひて花をへにをまう給へうゝいたきうつゝまゝせ
給へほとはいきうなをを給へほ花ゝ此ゝ花ゝ花ゝ花ゝうゝ。花ゝ花ゝ花ゝとうとてをぬ
り給へう

れをへい帝王なり。うへといふをもはらとなり。以下皆同じ。されど
しうにいうちれうへとゝまるへきことなれを。者きとゝまるなり。そうしいれたく
をさなきほとをもこのころれ書にそうしとゝまて。今とゝしこそなり。その
れそうしハ。若きの方へ
もやれ中とようにしふとのうへれきほるうれるを。うえはれそうまを。
うへとにそきせほひてき。宰れ。若はこれきにうていとけをうにそしたな
きてちしうとけふれもそうちあうみてね。ほへる。うほて酒うにをうしけな
り。若れををへとけふきをしほへう
無屋ハ屋のうちにむとあるうをを。宰れ。若ハ。おの女。宰れなり。け
ちしいあうそなるををり。そしたなくいうにいがけふとい。或紙うんに宰れ

若の。面うちあうをてうれしけなるを。理なりとをつうへなひて。以るなり。今
りけふハ。ようを酒まをしなり。きををしい。衣のををてをを。若き酒のようふもて
ををふたるをいう

くれゆく海にがくとをいとれをうしろし。上をこア。和文にさうくい。ほ。ア。れら
く。太平樂。賀殿かてんなとつふをふとを。長慶子ちやうけいしを。酒うて。弓戸にあはをい
て。おのれれのこちををへにほとをはくなり。申く海にうえの弓をと。はをみの。
とを。松風をこふうく。吹あをて。をしいとおををうし
賀殿を。長慶子とを。樂のあなり。酒ごて。弓戸い樂に。奏入音声
退出音声といをとのるし。體源抄。ほをなり。委しをとい。樂家にと
をへし。ハは。庭中れ。築ハなり。こふうくい。本ほれ。弓ふうをを。酒ない

いとよくもまれたるやうがおもてちゆきたるくもしてさいけの水なるたちさ
ゝさはるさむさにうへの序あるたゝふたつまう侍へりけりこれ令妻
おのゝさむうめ風ゆかいこほしうきこえさにうをいとはしかいてと
ら

池の水に浪ちさゝをうて岩うれなくのりまさえこうちゆき
たるけしきなりとゝしゆまうさ海をゝく出家なり岩ゝうさむきい海とハ
さゝとさむうめをこれあたうれをきにはさゝとさむきをゝふまき
り侍へうハ岩させ侍へうといとゝうゝ弟れゝうをいとほし
ゝまるなゝ！のしてイナイセウデなり　侍へりけり数年にる

圓融院

ちくもんこれ令妻は古院のれをゝ海ゝとゝたこれ度のり幸はいとたゝくあ
ゝこゝとゝうゝまをゝうゝれをゝなとゝ岩いとゝいをゝ申しさゝとゝゝうゝ故
へうめいをゝうゝハゝとゝこゝふあへゝうはにゝ九丁へたゝくあ海なめゝあそれ
いゝゝりくんなとたゝいゝんあゝはゝちこほゝつへゝうゝ

圓融院の宴に御屏風に四季なり圓融院は六十四代の帝なり申しさ
ゝとゝうゝ岩ゝくゝうたゝいまゝゝさゝをゝゝうゝゝゝはゝギヅン
ロルイといゝうゝゝちくもんの令妻の書ゝうゝをゝうほとにい海ゝさ
ゝゝ歩ゝゝ二けまゝ武新のんゝらひゝゝゝうゝゝゝさゝ海ふゝゝゝゝ
さゝに山岩ゝゝゝめなゝ九ゝゝ人たゝゝいたゝちくもんと武新とのゝるなゝ海ゝに
ゝうゝハゝさゝ海にゝゝゝなゝるなゝあゝゝんゝゝはゝゝゝあゝんゝゝのほといゝな
ゝくんなとなゝうゝいゝ人ゝうゝハゝゝゝさゝとゝ海のちくゝのゝうゝなくゝいゝへゝさゝ海

なりこなりうちこほにいおをうちこほにふたとしいはなり

れ示されあはひをしゆりしいとたをしろきにわるえのれするうつくしうきて

元隆上 右のれとし方あらくれ戸にあひてなんきこゆるとめてまーきて

元隆上 右集のうえなと方あらくお秋示とゆろ石にすーてあるし

道長公 詞 公任卿

れおほれ反あそしさらくのりまをなとしれほくあると思ふへ久か

うをけるこも作りるおをとるひなをしふさーなるこをおとはまうう

らとれたーるこをいとめてたるれ

ゆ戸にあひてとハ表文のゆ戸のうつくしきに音楽のあひてきこゆ

となり と行ふ狂いきれたりなといなにとなり あそれきいたひの

り音にうハうへていさるくのいはーとあるーをとよ京ふいたた

ふ所おれそこに空ふまへをれまを法へるをうれり音なれそれれ

ハ面目のまを音をなるうにいるなり 思いなれハ辞人乃おに悲し

て注をいり 原文おれにあまるるるる 續日本後記に出雲権守正

四位下文室朝臣秋津 卒 云々 監督 非遠 嚴是其人也 論

武藝 足称 驍将 但在 飲酒席 似非 大夫 每至 酒三四杯 必有

醉泣之癖 故也 ならとえたり ゆるなるとハ所にけるくといとるな

れそとるとゆ聞く 今さるーにほとと及えぬとなれとるとハ言しめて者

ーとおにとるにめてたーとるに聞くゆ戸れり音のうたーけなさ

を反れるうるをれにーるたれんを悲ーるなり

反はあるにせしさせ法ひーしはるせ法ひーて右のおとをれ所にめーてふ

てしらせしうき法ふ文つき度の家司（ケイシ）さえきうたり加階に（通方）陸奥ーしお
なれば奏せ法ふめり
いそ法ひてい弓にうへとにとさせ法ひて尾なり世ぶにめーて
の下に作ゝ海に法をしぶ名へー文つき汀侍に齋任卿
とたきとこは中文汀宮人とりへ名れは一人おいきうへうに度れ
家司ハ道長公の家人なり、さうきうたりハたひ中子法誕の宮式とに
労ある人をえうなり、加階ハ位をさはとなり、あれハこは、まて陸奥
して労ある人を陸と兼内ー兵へさせて叶ーめしおせ法ひーも
あたゝーしき文のれよろこひふうちれ上きアいきつれて物ーまう法
ふ度原なゝうとうしたはハ列ゆをたち法さうゝ

あたゝーしき文のれよろこひとハ弓にてる日本記畧の文に以第二皇
子為親王とあるをそふ後では又の日文の家司別当なと人なと識さた
まゝゝとをたりうちれ上きアハ民乃上きアにて道長公のうか
らなる度系氏乃人をなり度原なゝうまとハ不比等宮式男子四人を四
にとけて南家北家武家京家と名つけて式道長公は房系々れ流
にて北家なれは兵部の三家ハ同一氏なゝうとけたまいきれつゝに
ハ半ち法そはとゝ

齊信卿　皇太后宮公任卿　源経頼　實成卿

次ふ別たゝーになりたる右兵衛督大文右文よこうふのナナ。うへーたる行使宰ね。
つぎゝの人森諸に
右文右文数千の侍臣にハ同人とーて齋任ととにうへハ右文ハ中文
ハ中文ハ文ハ法れるなる風へー。これにまゝハ

右来の説、兼中文大夫にて、こたひ別書になり……（この報告書の別書なるへし）其の説なり、
齊作々公任々二人とも別書にかゝりたるとは、
きゝかゝりたるとて、其の人に文つくる法、度の家司の作るさの
すけ、しなと書中の傳法か、実成として作法、宰相兼
中文様、亮（桂亮なるよ中に三位のすけとあへり、なほ実成なるへし）と云文、中文
桂亮之に劣あるよしにて、かゝる作法宰相殿といふ、実成二人として
ハ、文人、其初花、其に次ぐ者にて、桂文中納言桂亮作法
宰相なとかゝ一法ひて、此新諸法とあるへし、大宮の大い所なるへし、又桂文の
こと、其文、既なるはさ、此二人をめしてかゝ新諸かゝ陸奥なるよしに作法
文作れるにいとせ法ひて、桂をもかゝ東へたるふけ、ぬれこしとおもしれ

いとさせ法ひぬ、又のあしたふ内のれつうひおさうとをかぬにはあれりうちや
すうすくして、兄になりにくく
文は中文なり、中文にて方にいとせ法ひとしはれ、ハれ陸奥こよ
ほうして墨書きを使し、まる手なり、又のあしなし、堅朝なり、内のれつう
ひい、中文れは使なり、朝雪をもれぬにといたくまさをつくうちやに
こゝは武部のまつりとなり、こゝは使れまれ流をえ法ふ
多の法、さし法ひまをせ法ふ
この説、中文、東にてふけぬのかにうつして作へし、中文の五長法をし
めて、中に法ひまをせ法ふにもしと、又のあしたとにて、おくく
うけ、ハまをしく、文のつゝたるやうなしと、この面書き面、おにもあて

主君に乗ーくんへりさしは次の夜に又のるよそをんへうをや
六ほうーにり世ぞちとそ又の日家の家司が当なと人なと藏さた酒
早々うきてときそ祝ときとれほうう
うれ文い表文をうん弁文の方人のうんはきうかをたれそなうされ
ハ々人表文れ家司よの使ーなるなれとハ人あそれ所に作り
ふ人をんてたまんれ家司をうかをんしちハ親主家司に侍従(カモトヒト)いあうれ藏
は藏掌なうきてよさとハ作ハ第乃藏掌とうきてうらなさ
れかつけていんきとかよかんうーをにそをるとそうきそむ
ハーくるーとるを祝ーとうんなへし　藏所にけ所
ひとうれれーつひまんなーにやつきなうーをあーなうてはれれあうさ酒

いとあーほほー
コほそれ夜のほとうこれほとまをうーあ酒ほしいあ酒ほしきはちに
なれうとうをなう
ところんすれくえまり接ひけるはよのうちあんてあけなそは度うへよさめ
早接ひてまそうーつきさて接ふれほひいとんことなく
んすれくい所まれそーほさうーほうのとなく夜まうハ遠長ちと倫ちと
こうのとなく祝をに品ーめちよーなうーちるにこたひ所誕生ハ宮まにて
されそーまいうちあひてとなくーまのうへハ倫ちをヤにしまそうーつきは
宮ちをなうれほひて宮ちのれさ酒なく新のにほひ名のふはひなとん
へほれ月にえへたなうく今ちきハ郊かうれたつやーなうを出うーまに

にほひとはいろとおもふと申し言葉なり

くれて月のおもしろきに。家のすけ（源経頼）。女房にあひてものいひたるよろこひを。

けいせさせんと家やあるんつめよりきたりと御とものけいひにぬれ。人のおよる

せさりけれはこれをたとのくたいかし。此つまなる。家のすけし。此つほねにたち

よりてわたくにやとあそはし給ふ（詞）

家のすけ。ありしく清水の涼にしたれとこれより程なくに此へるとく。實成々

なあへし。ところなれなるところのはかなけれはきなりぬきたくしのカクベツテイ手

イナルれ礼とも云ふにて此所に見えてなるこれのよろこひなり。御ともの此くハつま

此清少度なり

宰相（経房卿）は。中此まにようて満さてぬかれしれるみたしあけて（詞）たまにやなとあ

れといひてぬにあまのわくにやとの給ふにさへすて此のそんとことくしきやしなに

れはあるな死いふへなとれいとおもふことなけなふはかし死なまなり

さぬいろしのうけまなるへしいてぬにといふらふにて女房よきのいてく

あらうそぬなり。あまのこと経の人いとまれいふきれ中家あまへあ涼人のあいふ

にられ之へ説て此のそんまをくし死やうそれはあうをさいふへれとなり。

をくしはモウタイラヌキなりけうを説いくはサウトシタルヘンジなりとおもてとな

けあるいこうれしたるての人ものそし死なり経房卿中家ちこ此益實あるに

や。考ふへし　さぬ家による

我れいふへいせれあまをんとにまてなしきて御。もとうなうかうかくし。う涼

家に上らうのけちめいたりいろくそのうとあそはし給ふ

師が我出ゝへいせ給ふこくそのかとらふをして宰相の君とすへし。さていはれとも少納言をぬかしたれとこの君は殊に心よせありける御ありて消息文などにさせらしといふなり。又さては中の下に添ふるし。かしらに強ひそれかきことさらなるべしとは中宮大夫なれはかくはしてなほそ道理なれとあまりに注とこそ思ひつかぬしかしの添をかるしと見へ添なり。こゝ添木にをとい次の御に見えゝてかむならぬなれぬ強さ家と見いなるらたるは思ふしと物を見れは女房ともそこの人々をいさくるやをかしこみならさ歯の物によろしき添井とけなる木にして上らせからそれけちめ見ていふくその分とあそめ強てらるゝなるへし。あそかはサミスルにて事うさを思ふぬやしなるをあそめ強ふなり。されと文字に書いかすあまたさしてたらしとの強へるにやまつはおはあいつかまつするや なるをさろしとしてあそめ強ふなり

ひかふのたちさみとこえをうつらたりしあはれなる月をあかしからしのまとゐるさけよとせめ強へとはたらてうむさちめれぬ強さんも木とらえならゝふしやさし。わきやかれる人々をぬやにあまへたるを一かみ申添されなにかあきれを渦しとはいひは多かるに

たゝふのたふとき催馬楽呂の歌なり。侍中の遊書にふみかりしれよとは下にて上にかうし比みたしあけてとさに合せてるるしさけよは避サケよしてとりのけよ比言なりかなをうるは誤なりせめ強へといへる心は添へ係れりいと以下とうそれたぬすを釈するなり。さるやうしいふにいつくからていふこと

の局此下さまのうたをよみなるへし　雨とはあたらしき局なる局をいへり　あさはあさちにうつりやうさきさらをとふと咲たりまてつをはらさる水の下に我かくさだすきさまひなるはとふといふ御をいかてん給へしなにかはなにかさを行る人をとふえみりと許不義いをいふりあさ水はシヤレテなれくしくする気なり　あさ水そ伝し一字による

これわかは霜月のはしめたちれ日まれ乃人さ祝きたてのほりつとひたる此君のありさま後にうれたる御あそせの宗にそいとよりはしく行りし

此かは児生れて五十日にあたる日のよとなり　河海抄に五十日或百日供餅事也　天暦四年八月五日儲君降誕之後當百日依世俗例供御餅云々　花鳥餘情に子誕生より五十日をはしめとして百日をいはふかといふなる儀式ありて餅をまゐらするなりとそなり　うつほ物語藤原やものかたりなどにもみえてなり　御あそひは歌合絵合なとのたくひさまくの物合あり

これすれ木のたましひきそれにまさちかをれくれを御しよりひさしくれそしらせしひすとゆかせになてきらして夢れまてにたまへれ物はあそりすゑまり

たとしおきそれは侍衣の涼ふまつてとんほへし　たまへの物は此宗に語つへき様く此物なり

にしによりて北そ見それたちの生れ乃ちんのきし花なにくれのたんなりえのしそなるさ此をはえにれ満さひ雲和衣さあきてとりつく女房とさ右…こと

ゆひなとしたり

おほ宮、東三條院家にて、はかなくて、所名絵子一條院にて、所母后にて、東三條院と申にこれなり、は、皇太后宮なり、なに、ものは、ナ

ニヤカヤノトいふこゝろなり、さんしゝとゆひしたるい所五十日の儀式、ハをうなを

ものは、髪あけたらさまなり

とうゑのれんはなひは、大納言、ゑひんうしにより、さまなりたり、これさたれだ

れ、皿、箸、ゝとれそ、のだんすゝはなよりひくなあるひのくとゝゆ、具、はしよりひ

んうしたまのひは、れそにはずこ、あけて、弁内侍、中務、命婦、小中納、表なと、さ

ぶらひそとうつきてまゐるだくにかてくそうい兄侍ゝにたよひ、お、補れ

めれとゝ、ゆるはるこ、さはうちしたり、美宮、えいさにまゐり、五十れうちにて、

倫子、よろこへいさにうつしまゐりはひて、おそうゝてさせ給て、ほうけれさはうは

ひとにめたし、あらいろのゝ、れれ裳、ちゝ、れ裳うはそくさゝ、はれ給

はうたしけなことあそ小に、又伊、大宮、えい、えびそめれ、ゑ、れれ裳ずゝ、れれ

こうちきを小り

さぶれいさゝ、ものを着て、言便にいるなり、お補れめのとい、おに、大宮、つれ

もとゝ、童人、女のめれと、ある外れ、今一人れれ乳母なり、名ゆるさるとい、葉

きを穂さしたるなり、こしいはこしにてまゝ、さなり、うたしけなくは、

オソレオホイモツタイナイといふこゝろなり、あそれにの下にゝ、し、脇ゝるかと、給、表れ

そ小ゝり

反、もちひそまゐり給ふ、ゝちあの、れ、ハまれ乃ひし、れたれのにれたもてなり、い

右大臣顕光内大臣公季

西ふたところれ大宮とそまゐり給ふ、ゝれうへにまゐりて、また、ゑひそたれて

はしをはし

ものひいみなりの儀式の餅にて若宮に参り給ふなり。まんのとい江戸言葉

たるの表にはくしいて了。　大臣と新年にはく

をうひつ物ことにとなと屋の内るさよう海うちをたちとりてこそまゐるう

うらんにてけてすゑたりたりたちあり（炬火）に光りれんとなれハ伝か

ねなとをよひよせ。（紙燭）しばくさせて人とはえら

ことの河は秋に筵をうきて。長橋をしきて。菓を入て木の枝或（松）に分

かくとうたり。折櫃と筵物とよりにれみすの食籠をいてゝ出なり。

はうち若い宮つ公れて高出て天皇の庚茶にさうふをといとにて居たと

ひとをしはうちいおつの者使に就るなり。上皇に古事記傳にえたり。

えらハずえたしたる折櫃物筵物なとをえらし。　ことのよ新年にえる。

たちあうし一年たきあうしとに

うちのだんぎん所にもとをあるへきにあにとよりハ物いをとてこれ。これい物を

てとうきうしてえのたいふこにのすとにまゐりて上を（祠）アたをにめさんとけん

ぶ（きこしめ）つとあしい屋よりそしめまりてこな酒ゐり給ふ。そ

ぶんり此つはとの主（酒）てお給了

うちハ内裏なり。この食籠を内裏ハ盤所においてまゐるハこと此人

人ものと給ふんすなるへしさるを明ようハ物いとなるにようてことひ。そ物と

ものをまつとうきうしてものをおしるなり。初宮まに内のたんさん所にものを

はるへきにあにようハ物をとて。こよい。これものをまゐりぬ。とうきうし

いてまとまれり。と読をいはせん為へし。拙者ハ湖月抄に拙者といふハ惟ケの齊
しきをなとあるの拙者といふ字をみて簾なとにつけてありきなとよませて。
ていむをなりとみえたり。そのものたるなとハ河海抄にくわし。このころ
の書にいとあまたみえたることなり。さにのとハ中文の注にも簾のこと
なり。ささしめしつハ中文の。ささしめしハ和名抄にもひてめにすへきなれは。
人をおさへにおかり読ふ給へき御前にて、答を読みなりたつのそれハ御座な
とも独なるへし。初花をにそむしらの東の間をうつにて東のつまよりも、まへ間
てね読り。とあるをみれはしらを謂れるにや。　さあるへきにのぼりし
中宮とをになるさハ既なるなり
女房ふたへ立てねたりさされたり。ここにとを帯の間にあかりてね読る人ハ
よりつまにあけ読ふ大納言宰相の君、こかねの君、文内侍とね読へり
帯の間ハあかりてきくハたよりも東の間にあかりてねなる人ハ東の間北の簾
をあげ母屋の間におかりてねる人をは母屋の間をあるをいふ
顕光公
衣のたとよりて右大臣北ほころびひきたちこたれ読ふさなとすぎなりとつ
きしろふを弄りにあふきをとりたるふれとのそしたなきまさ笑り大夫 齊信卿
うけとりて帯をなふいそ読り。こさいうたひてはあひさ歯そうりな
れといふとなそしろ
ほころびれほころぞうしたるをいふ。ひきなちハ引断なり。さなすきハ人
の齢の盛りすぎたるをいふ。つきしろふハ女房ともなり。あふきをとり
ハ女房ともの扇なるへし。さの大臣の盛りすきて狂ひ読るにおかりに。

なとなしうるぬたをふれし法をきそたなし上ぬてなり蓑山ハ俗馬乘
長の寄なり三沢山に三に松ひてるるうはとよのあうにあふたの
さや あふたのしさや とうなふなり
袂のつきの海のひんうしのきらすに衣太郎よりて衣のつ海神ちちう袂へ
注つるくき人ようとなり 名ひのまさ小をあなつうきと元又たきうといい
なよ山ひ行りてうるなとようとにいうくさいをあくく人ようとけふ袂
袂をすへ（うめ）小
衣のつを神くちい芳に如唐衣（三つ）なたさ小ようるを如唐よ
袂 君よ袂ひなる衣のつを神になり 又たしうといなとこの袂行さなを
ちいていそたしうふうふ人をあくきなと思い行てとうこ君うさしとさ

るにてしとそ世ようたし 昨ハなしうとのとハ沢市ハ術なへ一省をてよく
きこと元あうてハ文何とのそれ又後本箱ハたまとうはなとなうしん久蓑の平か
小ハ祇とうハ三う詩さんなと思い行てとうこうといさ小なり いつれにも人
沢酔 小なるをあをつうて うなきなさ小ように三小ふつうて やしく
さ小ひきあく人ようとこの右大おはおそうに袂をうく搖れ詩了 とい
ふ意なり さ小をあさ小と同く ヤレかうぞめくはつうりウがルなり げふ
ハ袂に人ようはふとさと同く 搖りたうとうこと なり 侯午い海ちくなる
白さ なるハたうう 人ようとにて白なり
ふうさうつき沢すんのうををおはおちう注と 蓑のとなるひのおとを百代
にてすうぬ

志うハ然にて食を猶上古の書文をひろくうけて世ゐるなり。げんに今の世
巡盃なり。おち落ハ上戸なるべぬなるへしとなるべひいとなるべそへしなり。お
ゑ万代ハ祝ひの席にうたふ上奇なるへし。巡盃乃ゐるを。まんのとなるハ
祝ひの奇にて。ゆゑ〳〵そへ落へしなり

公任卿
五湖つ綾あそうこ記

ゑ湖つ綾あそうこ記のごとくに若ゑやさみゑふとうゑひ落上源氏
にうゑへさ人又ゑ落をあにうのうへハ湖てれそをの一落さん。ゑ文みゑ
あなうゑこはアキウレオホイとうゑにてゑをたゑれなり。若ゑゑ氏とハこの
式アを業上にかゑて志ゑたゑれの落上かゑ。さてこの式ゑをむゑゑ氏とゑ
ハしゑと河海抄袋草ゑに紙をあるを奥ゑ。むゑ抄にくゑゑうゑて。
さて一條帝氏ゑゆゑうのゑれなり。おゑれと抄ゑめゑ。ゑ世落ハし

とゆゑ紙ふつゑて。おれをゑしゑれなきとだゑにゑれにゑて落ゑるな
ちにて式アゑ毋一條帝のれ乳母なゑゑしゑゑれいゑの紙ゑ抄ゑて
あてなるへゑゑ。ゑゑうに今ゑくゑに若葉ゑゑの落上につゑて上にゑ。
何海抄に業上氏ゑをすゑれてゑれそれに式アの名をあゑれゑて。
世ふ式アとゑせゑれ久ゑとゆゑ紙ゑをゑうたゑゑれふれふ湖の妻ゑ
ゑ孫ハゑけひゑあ人ゑあれとれのれそこのゑにんいゑにつゑて抄をゑ
妻ゑくゑへゑ。ゑゑの源氏若のあハ落ゑ人ゑをれにほゑゑ中にゑ
ゑなくおもほゑめゑしなるハこの業上にかゑふ人ゑく若葉ゑにこれ若のを
さなゑ氏ゑとゑゑ人書ゑゑうてゑ世落上をゑゑて。ゑゑにこの若のれゑと世ゑく
ゑゑうゑあゑゑなく。又この若のゑたちんゑをゑめよゑつゑにひとゑうあゑぬ

不なりきはのてすくれ給なと。れ給へ。源や物語つ新の中にこの
云にれなく人を比一人をなり。世ふ世中北女のほんともすへきはあるさ法
をそめよりをそなりてつきにうれるなと。俗の人ふくつていずてなに
ともいとくてこれしさるうに。曲の人ことをいてくめてくれのつう。
て北或りを。義業の縁もあれは。むとき北とはよれしなりと。源くくて
にてをなる文によりておのれいうくをん点原。そ源や以下。或りのん中の絹にて。
源やいろうう。俗物源や物語なり。ろうつきん人はうくなそふれをなりうハしき
人とりて人云なりうのうくとハ。紫上の汎をなり。源なそハ。源てのを便にて。紫上
ハうりすれ給るは方北。うるをなりうハしきあるうにそ。源てなにをなりうか給
そんの云なり。ろうう。書家を論にも。むの小根にもにるとをなるハさるなりあるを

にうれそれふれは。源や北。書の名にをあるて。光源氏表を以うなり。
源ろく。可をうにうるうにて。ほうにてにうへきとあるをいとなるくしそれなる
へし。ふるれハそを。ほをあるとうをと。あのをつるをりうなれハ。ほれハ。ほれ何ことよく
うをへう。源や。を。書の名をしていうなるをは。源や。物語にそをなる物にうる
人北中にそをなりうハしきなるうれるとは。うる人をそれうれそをなれそなりと
いをれるく。北。ほ義ハ。書の名を。源や。とのをいふハ。今世北。俗物にほをれし。
とをれなり

三位のすけうきりけれなとあるに。俗物。雪れたちて。門のれそすに。行成 公季公
ふきよりにしたるをうそれ。れなれそれなれ。ほ人
三位をハ。ほくうの。ほ上なるをうそれ。この。ほくくハ。ほ光の。ほくなるをうし。

のたまはせしよしみえたるを
何ハ実成よのまゝ也さて三位のすけ侍従宰相中将兼官にて節同し人也
侍従ハ宰相にてありしく行成などしたれと誤りにてこれは実成宰相なるを
源へしきよしハ前の巻肩の注に宰相とあるをとり秀のちくに侍従にて
中将あるこ実成なるへきにしるしをおしこにいへるならし前は前の注にしるし
きるへしさて実成ハ太政公季公の御子なれハ父大臣の中でも中納言にてし
りてたるなりけハしもま中将なるへし閑院大臣の名前にて侍従なりしよし
なるし後人まし前父の忠義公の叔父の公季公はよりかるをいへる大臣に
たるし中将を宰る実成なのいふを侍従宰相ハなりにてたるするを見ゆ 信
経はなるへし

斉信卿
権中納言すみの御前のそしらるとにむかりて書きのたるとひてしるひきてこへ
たちふれて君と殿のさまに
ひてしるひハ引ハリアフにて書きの上とねを引ハリアフかりのこと
まにハ制し給きぬなり
たまろしきハこま来のれ君ひなめりとえてことまする消ふ宰相の君にれひあハ
さてかくれなんと思ふにひんりしたまてにとのてさんなら宰相中将なとい宮こ
さとうしけまはやうりこちゃうのりしるふぬかされたるをよしきこえさせ給
ひてやさりなくらしよくへ書きさせ給へりきかひとうつはかり詞つれ給はゆ
るさんとの給をにいとをしくたまろしきれはきこゆ
いかにれうてかるへやつへきやうとせのあ御りひさしき君かこともをは
あきれつるしまつれかれとうつひそうりすせきせ給ひていよううの給させ給

流

あーたつ氏ものしひーあれハ君ら代のちとせをかさねうるうとうてん
さはらるをひ法つをあちにをれほしけるとの法なれはいとあれかこ
とうなり

れきらーうをハ辞へ係りいをく強法つを面の君ろしきほとなら
をいてとそつるハをを水の後式のそつるなりとうちうをせハ流れたる流れを
道長をのとくのけさを法つくとうへすえい通さーとうくて世をにおき
法つくうハ和歌ゆてなるのハをひの奇しさて初白はナニシニドウシテと
ひ言にてつらくいる詞なりやちとせ弥千年(イヒーチヒーセ)にて流りかれ言なりされ
ハ流りなを孫子系のあ流りにくしたる若系のり末の序代いろ世へん

とすれとも十ニシニドウシテうを世へやうるつきをといふ言にてり末を祝ひまし流る
なり又初白にゆ千日をなをいれうとを世ハ系羅いれうこの奇後今集賀
歌にいまりあそれをを道長公ほめ法つるなりとうハ疫(トウ)の字便
にて道長公のやそをつうとを白を法つるなりさて初白のあしたつハ和名
抄に唐韻云鶴音零揚氏抄云多豆今按倭俗謂鶴為帝鶴是也鶴別名也と尺てたく鶴ほとを
奇ほ言ハ枝をを系を徒とうハ鶴の齢乃ある身なれハ末なくなうへ
てこれ安れを系へ法をん数をとう世へとうてんとの法ふなりいうく言ハ法
つるれをちにををほうりに白をを法ふつきとなりされとこの奇初れをに
も後拾遺集に尺たるも二の白白をひしあーはとあるれにをハ我身
あーたつ乃齢ほある身なをハ云う代のあ系の数をう世へとうてんと世つるにて

いうてあーたつれ齡さあれうし。と那ひ注ふ云こともれう。次の花ーけることの
さ面なれは。と出るを忘一はあ〳〵ハのうるさ法りて文伸。さはうはソレホドなう。
れ所ーけるとの主面なれそと。い者れ社をふきの出実云の面なれそとつふ云
なう。されとあれそのうたふらハうまてうくとある〳〵きとく出ーめしけるて
とのあるあ不なうたく〳〵注ひたるまーと文伸いとあそれにとろうなう
といさまに忘ーめーたるれあうさ面をそて。イツソ感こメ〳〵テオダウリナリと
出るなう。この所にうてとあ。ハれるさ法れう。　いとそーうーに平にる。
注本宮ハれとそーたなくにていあ〳〵しうよいそれうう。初発生にいとそひー
うれそろーうれそとそたり

けふうくゆてきーきこそ注ハにて所きいうつれうきうを面さ〳〵を注ふめれ。
ふ代きあそ面ーくはは伸くする名れうになーぬおちにたふれそひつはーる
けふというくゆて。ま平ー注ハを課なひて当なううきうとはいさーきこハに
れゆてきー きこそ注ハにつけて。方れ車　拍乃それにうきれて揚ことと。
あそ面ーくは。アゃカリタうなうれり余い若文乃なう。れなーぬ式新う
こうーれうハなう。出ひてけらるハれり事れめたるうき出き面れ今うう
出ひつけらこなう

堤長寛
文のたまハきこーめにやつうう面つれうと我ほめーを注ひて文の出てにて面う
こうーに面うむすめゆて文こうくたそーまさたきこと面これそれありと
出ひて。わ〳〵ひ注ハめううれをとこはゆたうーとたゆひためりとたそふ
れきうそ注ハよ。ふうれきれ名ひう乃面それなうと又伸。さることをけれ

はさうしきうちはしれのうしめてたくのうさてあさて法ム
うち花文はすべて中文なり。さこしめほやはいはうつくしく花分のうとなり。つう
酒つぼりハ分くらゝ作りうとつ山ほとの名も桟ほめハ自讃なり。てはは又
なりうつほ抽枝萬安にをあり。又景花物を衣れに大又を花ほてとと
もゝうう。酒ろぐはオレガといふほとの詞なり。そは中文れ冊にて倫子
乃巻とゝ。ゝい法ムめりハ逆長花ゝうたそ山れとの法ムを又て笑ひ
法ムをれそひあうと思ゝてゝゝい法ムなんと思ゝての法ムを又
たゝふれなり。ゝれ男はいゝうゝれとなり。但し今又美男花高ハ物ゝ
にすゝハ物ちてあうをつめて出るなり。これきはかゝべつなり。さるを然
有事（ルコト）にて家にあゝしことをいふなれはなけれをといふことてはハの志

いてゝゝこれきれ砕まきれ乃なふれてゝ不申れとだれなふれとれこ
にてこゝうハきことなけれをとゝ意にもや花ほさ物なり。師ハさる
となれはとあゝしをゝつし張りるなり。おそうの子にゝうハふきとゝうを
さることなけれをんひこはやけに笑ぬとなり。といれたり。さてあ是法
ふハ所方とれなり
というゝ人きてにゝゝとれほほやとゝ法ひぬうけゝうれなれそ（羽）たくりせに
てこおくうゝみ法をんまれ物とゝていれきこてはれうちをとほゝせ法ム文（羽）か
めゝとれほすゝんなや花あれはてを面とうゝこけまとうちつふやき法
ふを人とはわゝひきこ申
きてくゝハ盗長ゝれ戯こをなり。こゝゝせハこをうちてあれ花なり。此

くりせにさとい倫子おなじ〳〵源〳〵せ法〳〵を差てまゐ〳〵に八服を法せん
とて中文はなり〳〵まれは九丁は内を取〳〵せ法〳〵なり〳〵さるに中文
はなあ〳〵とおほす〳〵んとなり〳〵これを程たまふれなり〳〵なあ〳〵はブレイナブ
サホウナとゆふ意なり〳〵はやのまゝ子とゆふもの親乃ゝ〳〵つくによりて中文
なとにもたせ法〳〵なれは親由忍にて程ゝ〳〵とけまとなり〳〵程ゝ〳〵こさ
もオソレオホイなとのゝ〳〵こさにて序分はやむとなくなるを口ゝ〳〵ふやく
八今ゆふと同〳〵さて上にはいゝ八表月のつゝさちは日〳〵ゝ口ゝ〳〵程をてはゝ
十日はをゝ乃さ侍なり
〳〵せ法〳〵ふきとともちゝうなりぬれとゝ人とゆふうちつきはゝ〳〵のゝなり〳〵ぬに
程〳〵にそはさゝ〳〵つゝゝいとなせ法〳〵ふとてあけたてはまつむゝひさゝ〳〵
ひて〳〵さゝふれさゝ〳〵えゝゝとゝのへてもはれゝゝうはれほんとまゝ三ゝてゝとゝろゝくにふ
みゝきゝさゝゝゝうはとちあつめ三たゝむるをやくゝ中てゝゝゝ〳〵に
〳〵せ法〳〵ふきとゝ中文内表になりぬれとゝのとゝはれさゝ〳〵〳〵つゝゝきへ係りゝの
とゝなり〳〵ぬにのぬにはむゝひさふ〳〵ふ三へ係りゝふとゝ中にぬれとゝのとゝはゝ
ゝを誤れるなり〳〵とゝそとゝたゝひに誤れるとゝはれの書にとつまおほし
うちつきはゝ表ん程ゝ表ん程ゝ表ん十日はとなとゝなりゝうち程なりゝはさゝ〳〵しはた
たはゝ中なりゝ程ゝうゝ〳〵しめ法〳〵ん三ゝにつゝ〳〵せ法〳〵ふなりゝむゝひさ
ふ〳〵ひてゝ中文の程ゝにはなりゝはれゝゝうはれほんとまゝ三ゝてゝはつゝ〳〵せ法
ふはは草ゝにゝ三ゝてなりゝふゝゝゝうはゝゝゝゝるゝ文にゝゝゝ〳〵ゝて人ゝにゝゝゝゝあ
てゝゝ〳〵むゝなりゝくゝゝるゝはゝゝゝゝゝなるへゝと法花経はゝはゝはゝゝゝはゝゝはゝ

ゝをとはねこの沢乃つとめにしてこれ高なり。さらに又こたるもれくろうハ采
死物沢烟後に物沢合せ。このとおのゝ妖怪の考とゝ
ハ人こゝふまうせてつくれるなり。されど武蔵のこつゝつくれるも弱の人のと
ゆるへし。又こゝに又こたるかさうしの妻しき考へハ松の葉集に又こたり
なにのてもちゝつめこゝにうるとはいきさせ給ふまれゝゝらに
うゝやうとゝふてすみなとゝもてまゆり給ひて世ゝりをきへゝもてまゆり給
一ハはゝゝせ給ふをゝこゝそしまてゝもれくゝ国にむひさゝひてこゝる
とはしいつとゝんなむなしとゝるこゝさすみゝてなと給をせたり
なにのゝ逆長公北中文に中給ふ詞なりつの方き今ゝふと同し松草る
にとゝ中うゝとはいきうし給ふとなり。拾ゝハ拾なゝ北言ゝうに

やうハ幾分ゝとゝせ給ふるハ中文北とゝせ給ふなり。まれくゝ国ふゝ師ゝく
もれくゝ国ハ世給ふな。如房ゝちむゝむひてゝゝ北たるあなきさうし北とゝるき
をゝ北せてこゝるゝとはしいつゝといひてゝゝゝをゝれなむなしとゝるゝきすを
ゝまなとなり。をたしはせんゝなくゝゝるゝ。といゝゝ名ゝく といゝれゝゝされ
とゝしりてゝおゝにかふとゝやたちたるものゝけなり。ゝれなむはセツカン
スルなり。 こゝもち新中家による
つけきにおゝゝれ中ゝとゝにやりてゝゝくゝ松きたるを世界にあるほふや
をゝたゝこ国ゝとおゝゝせ給ひてゝれなれゝ北ちんの友にまゝ給ひてけり。
ゝゝゝうゝゝくたゝゝいゝをひきうゝなひてゝんゝとなゝ名をゝとゝ国

つぼまよいかくしなさなへ係れり。とりにやりて、我里亭へなるべし。はるのに
きい沖まえれはるのにあるあいたふなく。やをらは、ソツトなり。れそ〜海〜てい
道長公はなり。あこるい物を捜し求むることをいふこれこころれ書に見えた
ゆ。れる云なり。百樂集に求食とゝけるいかゝをあらる
とゝ神氏ひとつにつきて書う安へかゝそし。内侍殿、展い妍まなり。
苔に見えゝう。らゝしうきい。らゝしうゝ見えなたゝ。物語いこれ外へいきう
しなひてらゝしうゝぬかれこれるををり詩ひたれはんさとなれ若をを
とう物うえんし。とゝ物をいれてんはるへし。そこにええるいこれをつうゝつくれ
る物語なるへし。とりにやりて。數年一年による
そう文はれゝうゝ なとをさせ給ふ。うちにんさとなくれほしのにとゝうな
りゝし

れ物ゝう。者本まに旬文れれるのれ文十ロれ本にゆゝしさそし。ゝろゝうつく
しうしたゝやうに物語。うちゝをを詩ゝとををそしれを今いとをれを児の。
物ゝとくなるをカタルとゝるれを出るなゝらのつまのれとなれ物ゝう
とは実なゝうちい内裏にて帝をを中をれゝ
れ泉れ池に水をとれ日ニにれほくなゝ甲くををゝいゝ七詩を物を祭雪
ゝゝなんこれなゝ乃あゝさ海いうにをゝうゝんと思ふにあゝゝ海ふま
うゝて雪るほと二日ゝうあまてゝを雪をふ海を物ゝう
いゝ世詩を物い中文内裏になゝ。雪ゝゝなんいふれゝゝと歌ふ言れ河へ
これおゝ文を庭ゝなゝ。をゝうゝんと思ふにのゝにゝゝてとゝふ物をん
れゝて見るへし。あゝゝさ海いゝゝをめなゝ海そなるい我里亭へなゝ。二日ハ

うりあつて しもいんそ雪ふしかうしと祇ふほといふて 祇園おして 二
月八日あつて あやにふとしふ雪をうしと いふ祇 あやにくふあさしり
雪いふるも 祇ふ ブルホトニ イタクフレリといふ雪なり 松ヶ崎にはとろきあ
やしむをにはへり とそて
りこの祇 数は 大後に 元方 或ア 祇 うほこ 海 けの 君にて 祇 まるころ
三ヶとの 祇 庚申 きせ 祇 ふに て 祇 武ア々 生 ヶ 祇 ふ さ なり 九条 殿 さ
うて 生 祇 ふて ひ く あ ま こ さ ふ ひて ご う た せ 祇 ふ つ 世 に 冷泉 流 の は
ら ま ふ 祇 海 し た ほ と あ て さ ま ぬ た ら ひ と い く と 祇 ふ ひ や な に 九 条
殿 こ ら ひ ひ す ぐ ろ く つ う う 海 つ ん と 祇 ほ せ う う 海 に こ 祇 う 海 ふ 祇 ふ
る み こ を こ と 祇 に こ は て う 六 世 そ こ て う た せ 祇 ひ け る に た く と に い
て ら 祇 ひ と る 人 を そ ら ん ふ ん し て を や し 祇 ひ ら れ こ つ

うう こ い み し と 祇 ほ し な り け 海 に と つ う と 同 し 祇 数 な り 大 後 な 海 と い て
き な ほ ふ に く ふ い て き た り と い ふ 雪 な り 松 ヶ に 雪 を れ ら ん し て ま う
し よ 海 そ な る と を い み し く に た せ 祇 ふ と 人 こ を の 祇 つ う と そ そ う う
雪 ヶ う ん 数 ヶ 軍 に よ 命

そ と こ ろ を な 祇 ヶ 海 ふ の 春 ち を こ る に を あ む つ の う 祇 を ひ こ た れ て く
こ ろ つ ぬ く に な る あ り し ち し い て 花 を 祇 き を を 称 ヶ て 春 秋 に 申 祇
う ふ 宇 祇 雪 し ち 月 日 新 素 雪 を そ て 祇 の 時 き に け き と は う ま ひ
こ た う

そ と こ ろ を な 祇 き は 中 宇 祇 春 に の れ あ う ち 海 ふ む こ て 祇 星 亭 祇 ち 海 を
ぬ 原 弐 拙 ち ち う は ム サ ク サ と し て ん 祇 す 海 ぬ を ん 上 な る あ い お ち ひ

されあるをうれしがりて、をちかへりまなびとさと、ねをいれてんぢへし、
をちより、霜雪をうけて、変れる所をうくさしもたゞ四季ばかりつゝうる所を、
文章にかくれ人なく、ふしと、美秋に申ぶるつるにれのつゝ、変もとも
れりまして、霜雪をうけて、それに、宇れ、ゝ、月れ、新をこれのみてひとつに
こめて、以り、物の的きにけりとそうい的をるれをにしたをうし
よもあそれ、ふそにとなりまるはそつゝれ物れをれ乃あ流れなるへしさ
れさ所流くにこ申
いうにやいうにとそうゆ、ゆ、名れ、仏注物さはやうゝなれもれうゝ、そうなれ物
うゝなとにつけてうちうたゝふ人なをし　人なるはあそれうきかいしずと
し、意とほきたうとをたつまてをいけるをだくれをさ面くにあく
しられ物ゝうとにつ少くをはなくさあつて、世にあ流つを人かにとそれはそれなな
うゝ仏しあたりてそつりぶをしとふひきうゝはうゝれたまをは法
もれこせうをれくなれひしる身れうさう面れ
いうにやいうにそいうなゝんくとり未をあやふむんなりやうゝなれいんほ
物くやふんれ考う方れなれなり、そうなゝ物うゝ人れそれにてい、あ物へ
うれうれ、い文をたれふとうやり方流へすこ一家とほきうゝ人同一んなる
人中は、家者うきあうう面てよ物りをうれ物ていれやれりよなりこれをは
同一んなる人をれ、あ、しらふはつキョクモテナスなり物ゝうとは分トリク
ツモナイコトにて、ぶれさるなれ物うゝうなとをり、世にあくさうい、つうれ
う一を、早下しをん一流ゆて、れうれたまし、係れりまうゝしい物んにうゝし

とおもひていひしもすぢはカクベツなることさへさすがにつらくおもひし心たえ
かりけるとはいつかしき男意にてのかれたるしをとなり清にサウチテアとい
ふほどの意なりけるこせることなくいふ所をあらしきをいとふをおこさに乃
意なりとてあはれしるはあはれにとなりしきことを我身にひきうけてなり
けふそにおもふことをとりて見ればみえしやうにそれほどにあさましくあはれ
なるしんけるたぐひしあはれと我きえんにたよりなくいとあさましきものとおもひ
なほいふかひなしとおもひしそうに物語之などぞわりしとてえたとつれづれに
この物語え物語書なり又此思ひの清かりしにはやとふみにとりてそれ
と言はこのおもきさりしあるりにみえしやうにはあらなりあさましくあは
れなりしはあはれにおもひのさ清けすられたる心あさましとおもひとふたつ

にえあるはいかにそサゾなりけれなくは万葉集に暮相而朝面無美隠尓（ヨイニアヒテアシタオモナミナバリニ）
加（カ）云々とあるはあさましてあさましく面目なき意に思ひきるをこの源氏書につ
かひなるはそのもつかしく面目なきさまなるをなにとも思ひたるしあるをいれ
ひ又たてオシノツヨイといふ意あるといひてツラノカハノアツイといふ意（こはつきくいひつれ）
源氏外にも物語にふれまちをすてて清さ思ひけるありて我なさことをいはきちを
りすつとはおもひけるとえそて田舎太夫かこの物語の解に端本集も大かたさまり
にれえれるりけての外井書此書ともにみえたるをみ合せて思ひへし我きいか
にさと思ひけとすしんといふ今は井家を仕此ともにつかひてあれは思ふはかり
もえあるてけのかうあさましくあはれなるしん此かたられしあるへもう
とくしくなりなるをあなさにはしられなくんあさきもこれともひけとある

んとしふかるへし　おれさへいむうしあさ海しくあそれに思ひしへ人なりさて
こそあるうらう涙の袖をそ世とのの君を出るやうにもなきそなれとすてこそ
日光のうちをつゝそすきさう帰りきとたてそえたるとなくれくそ人は海さ
とふ字うたをゝをけかと吹てたまは祈おとうそをるへし
ふにくゝんと思ひたる人はれにほゝゝ中そは文やちゝすんなとうたうそへ
うめれはいうそうは我ふそうちあるさ海をふうう祈しそうんとおいとも
りにそれとあんをゝれそ中たの申とおけをとおのつゝあ海さうそ中る
おすをちゝまりにたりとと思ひやりて祈とれひる人をうたゝなと
しそすまそにそるをきとふれてとあゝぬ世にをなるちゝ祈こそにそし
もうちをさう拾あそれをうけける

ふにくゝんを人は武ゝうんにしら思ひたる人をう祈にほゝゝはバツトし
なる云中今ハ里居をれそ中をそ祈里にのを侍へそ侍るゝへうなをする
をそにそいとをるをさそふにくゝんをそ人をふうちそ無しをさ海を
とうそをる文はバツトしたる祈ふにそいをを文やちゝすんとうたうはるへうめ
れはたのつゝ消息をとをそ中をそ言つれせぬをありとい言をそめ祈え
ハ中たの申とをそ中をそ申へ係りいそうそくタウシテなしうちあるい奥ある
にそ我母云ゆをとあをとにそいそふゝいれしそうゝんとをあをけれ
をそナニトイフワケモナシニといふほとの言をう中をそ申とをいさはやうに中そ
たゆるにそあそおのつゝあ海さうそ中をそ申るをあうとを祈をいれそんゝへし
されはさをうをるは祈方人すみつををきたをにをなるをゝんとおひやりて

なりすみいぬ　されば我を捨てにしてなりきからふ女をいかなるべしれば
らねすむとりとは男女乃許にをひすむにてすむともすみつくとも出る
つまとなれば男よりの方を出るやうなれと捨さきにそある所きとあに
出りれとれひらいれとられ居るまてうれきたる人乃うちにもたまく者をい
ある人なりそれをうたるすいすみさたまにたるうにうう今いかつ
うにのこのつくひてあるれもかるへしおれ我をいかにれもなくんあさなきと
出るをあらそうひてうえへしうたりいい勘当にてあるそヨセツケスしてあるをい
ふ所にたこれをうにあしらひとは出るうなりあくぬせいふくぬせう
れの方にてしまい年にすきなれ所様里亭にて法へとい方んさて
上れいかにやいかにと出風うこれをて中実を仕出れ事れ如方をのうへを

思ひ出て出風なり吹ふうたるいを仕侯ほれあをのうへなり　繁千一話
とに　うれ半ゆるとあをとに　あそれなりけるゆにらる
たうえうにうちうたひすこしをんとあてれをふこ海やかにあをんひからふさ
しあうてれのつううあつひうたうふんそうすこしなつうくれをふ様
ほれおうれや
をくにいをなれうたうて老ふとうにある人をて清軍なをを出へしず
こしをいすこしなううと我ん れとあるうれ人を出ふこ海やかにをは
いつトヤストクジツニあを出ひうらふ人をくさあうていふをうむつ海き
にいあう称とおふしとふさあうてうたうふ人なうさてをうにうち
ふうふ人をとあてを出ふ人いひからふ人もつひうたうふ人とにんをへしを

うなる人のこゝをこそこゝろはなろうしこれそ義おそろかなるやと出るにて御
はゞ〜〜人なるあさ海〜くあそれなるし〜〜人ふくう〜〜んなと学ぶ人ふそ〜へ
てこうはゞはゞうなるをなろう〜〜ふ物をろれし〜とかう
大納言殿おろくはゞ学へにいとちろうふし〜ひて物をうし〜ひし
言をいうこひ〜こゝとなほらにしたひぬるんゝ
我は亭にて中宮の御ゆをもひはゞしたるかう なほらにそゝとい学
にうつ〜んをはひさたゝくだし〜八なくらろつまするにをうをあやし〜ひ
又れもひうけたう〜〜れひくうたのそつうてなと学をて仏の道にふうく
出ひいうたう〜〜にもうく中宮殿のこひし〜ひそ なほ世出ひ景観に
したひぬる様〜かなとなう

うひをせ〜水乃うえひそこひ〜〜そうをひうえけふさうえ様れるうぬ
初月は我里亭なゝ女中宮まはのあひさんやにくおとけてそえいをぬ
を深るやうなるにだとゝそれ原ゝ二月のの水乃うは初月の緑ふひうれて
ゆうれそなりさえはとエなう〜〜ゆそれ宮中宮殿学にまはして神ゝる様の
はるれそ意〜〜て我里亭にはいこの院乃鴨乃上毛殿さゆるにはれうゝに
さやきこゝれとはゝ原ゝ次ふ逸〜〜とあれはは学のはゝを意〜〜く出ひはて
なる海にこの学ゝうみて大納言殿につそ学なう

逸〜

うちそゝふとゝなひころひ学さあにそつひ〜をし様ゝはふこひ〜さ
うひそ海なとはへいとおう〜さをそ学海をと様をはる人ゝれとえ海

うちそゝふハ駕をしゝとゝのゝ乃上毛にたく雲れとなり、初にそ見されとゝ古れ雪
にそうゝ風とれほし、二句ハ式ア紀里亭に逗おくるほとなれハ友達のなき
らしなり、つゝしハ式アとゝのゝあアしとなり、鶯ハ式アにたとへたり、さて
上毛の雪をうち拂ふへき友達れなくろれ寢覚にそふるあアし君
をこひしとゝふとなり、かゝれ酒なとゝ法へきゝ雪れらの雪なるに文乃ゝ紀
さ酒なとゝ法へをしとゝなり、雪れ十分ナルなり、さてこれ雪、ニゝとゝ彩勅
撰集に入ル

雪をれらんしてをうしを酒をたるとをなんいとしくにく酒せ法ふと
人ゝをれ法へり

れらんしてハ中文乃ハ悦してをうしく書ふりてをうしされしと式ア紀
延おをにく酒せ法ふとゝさてをらを人ゝれせうをこれ中にハひれたせ
たなり、ゝれ大和文乃延しと同ハなゝへし

とゝ法ふ人ゝれせうをこにてをうゝとめしたひなれハことゝ法ふにハ法ふ酒
ゝてく、とく酒ゆゝんとあゝしをゝとゝて法ふとゝ法ふ酒なゝとゝ法ふ法せ
たまはたをふれ出てとさゝ法ふ法せてことなれハうたしけなて酒
ゆりぬ

清悪ハ文をとゝ拾おるハ師をくをろゝとめしたひなれハとゝにれ
をゝをゝてくとゝふまてハよゝをゝ式アをゝをゝみ法ふれ酒なゝ、とく酒ゆゝ
んとハをゝるゝ時ハ式アれひしひし、詞なるをの法ひしそ、れしをゝをゝ云にて
をゝとゝれゝをゝ法ふ清悪の文なゝとんれれゝとゝ法ふそワザトなゝされ

は式アうんにおなされ出てさきうに作ることなれいうたしけなくおもひて系し侍なりさて咲くさゆなとはあなさをうや海ひていう河なれい我らう上方人事に河れ拾なるをたにうらいけへされ拾にそたうひてひうとなり非番家なく侍まれ上にの文まれなうなにてさの絵をせなりさきしいでを重文けなるなりさの絵を咲きせとふ次にたえるなりとうることはあ面つきとは思りといまれういうで侍ふは十七日なりいぬのよれなとそつれとやうく和ふけぬ

中文内裏にのくて侍ふなり日本記畧に十一月十七日甲戌中宮入御内裏本宮設饗饌也食とそなたなりきなうみあけつかる人井よ人井のほうにそそうにまやれひんうれまて

ひうしれひさしにうちれ女房を十よ人ちなみのひさしれつ海とへたいうなり井のほうにもあしと侍をれしてあ海さなれそそうにとふ完なえしいちれ女房い見乃内裏れ女房なり川近へれたのなとにて系侍なえへしいれこしにそ文乃ちんしれる

中文れ裏にめれといのとうれとなれいたうく俳諧の宣旨をいひて完れ中文と宣旨とれこしに来り侍ふなりいとけのれ車にとのうえお捕のめれとうる安いうれ侍れる

倫子と若文と乳母のお捕と三人赤毛れ侍車なり

大納言宇お若こうまつくりに

これ二人（ニカ子）をつくりれ車なり

つきにたるほにこかねの武内佐

これもまた二人なり

つきにうほの中ねとたりなるをところきんとたりたりと見たりしなり

なことくしとんとうほあるうほもつうしうたゆいたりしう

これにて馬中ねと武アとなりところきんとは武アといむつほうゝぬ中に長文

見ゆに早瀬にすこて男も女もところもたそうつにしれるうこれとちの

こうなくえをつきんと見るうをいとほしこれとあるところもたと同しくナて

ハンナヤクモノをところきんとゆいほ中ほ、とくしはキツタイラシキなり、これは

この馬中ねをところきんとゆるは人をたとりて妙方をゆしあうなるつ

なるをとくしとんほなり又ゆふにこれ武アいこれ次乃車なりに高くへき

今孫なるをこれをこてちく馬中ねと同車なるをとくしとゆるつに

もきこゆしよ次ふしこそふとほていしなんしつて、とあれハ程さにそあし

うほあるさほハせ乃ほしらんをいふむつうしうはおむつうしうとおにある

にれこそ

よのそうれ佐程、武、兵内佐、次ふ左衛つのなんし、よのそんし、ちきふとほては

しだんしつて、つぎくは、まれのんをにるのうけ

よのそうハ官名中て尚殿典殿ちうちなるへしこれと兵内佐と同車なり、次に

左衛内佐以下三人同車なり、そこれ、そ、ハ方のほとゆ、しうゝぬ女房よな

れを車に次第をこしつて、ほていたしくゝ高うしをこれんて次これは次第も

なくんをに高うなるなり、まれのハ以つとうつなるをうをいふ。　業平。

ムこそのりけりとに

月れら面なくふいみー汐さやとれまひいておしを拾ーなりう海の中ね若

をさにたなたれは申ムをーうにたとくーきさ面ノ花ね我うーろをろる人

まつーくと出ひーらるい

さて内裏に申き若きて車ちりたりて局まてうちてあゆむほとなりい

みー汐さやい月れぐをなきてうれなくろーれんとをいみしのをはとれ

ゆをーいをを完をなりい為きて歩むほなりなとくーきいりきれほ

つうなくふ葉内なる方ムさるはうれ馬ゆねいて老る人へなとにてをし

ほにてうて申くをうれるにやまうーくまい我うーろてれさる面ろる

ほ面のうひーられてまうーきなり

ほ病をとく三のうちにのりてふーたまはこかね若をたをてなほこ風ありさ

面のうれとをうろひてすくをたる夜をれーやりあつみえるきき

いとうにいををうきいれて身をいえにくゆをたなをいに

ほをとく三のに花宴をにを尽て河海枝にかうり貫三にあるを戸なりこ

ちり あの三のにをおのか根か禁中なりにとあるいたるりなほうるを

はい中宮の四ぬれすれて人をなくゆをたきを面なとこれをこあるを出をにに

ゆりてソレデモヤツハリとふをこまてうく中宮の依怪をうをとにするい安

にそなへーすくをなるいあつめてなれうーにてあつめてなるい厚く肥なる

後にほく入れてふくーうなるを出りいをかくとうをうてまれて

ーたなさとらをへーおに為ふうれて雅云、河一何ゆを面なり

行隆宰相（源経房卿）　成卿宰相（公信）

中ごろ、おらひさ、なにさとしたくなれば、やみをもやとれるこを人の
とひさ、ぶらへ、なるへし

行隆宰相、こしを実成々なるへし、中ごろは、かへりテメイワクしといふこと
なり、れうをの下にゐく人をもとふらいたるは、と俗を入出をもとふ人、
し

いとあしなふまり、作りんから、ひそたへさく、身をすこして作るなと、とな
ひて、おなこのちんれうとふらいろ

あの人に、武アのいくへする、相なり、いとあしたふは、アサハヤウといふ云にて、明石
をいふまり、作りんいこしらうをなるに、身をすこしいはを云たし

なり、おとなしひそコトナサ、ウニなり、陣い陣、屋なり、いづそこのにをいそたら
にてこれ人をにあへらふをあもろうしく思ひてなるへし。　おとなしい新

たのうちいちと、ぶくをたにそうれは、と人をはと思いたるう、ふる身に
らをは作りに

ひそ三のにをいそたらにらてうらい中、文の品送りしまりてとそて、家改へ
いをきうるまれあるをえて、ぶんなり、なにそうは、どんホドノといふ云に
て、人をになるぬまれをいふさしそなにそさの家改へといそくちとのうん、

といふ云ふ出るなり、ちと人とい今里にる人をいふ、人和をそのぞ、つけて
いふをなり、ぶいたるう、ふいしうふいていをきうる人乃うしろの、ぶ

らるるなり。我身にもといぶそ家路にうるを人うとなるあもとすれ
ばなる我い人うにうるはけまとさやにいあ〜に我もすとらうなたそう
りれまれわをあるにとりて人うるじまそ今うれ〜うるあをそそとかおれ宮の
うちあそめあるさはやそいれそ次わそらしを立了
大きれせれあるさはこかれ宮れいとあそにをうけ出そらをうしと出そい
しそそれ注るを元作るなるちそ宮らるるとそしそそて人乃ほとらるはれ
れいのそられくれそれ注るそなるうるし
大きのせのあるさはいそ作るなるへ係るておるせ宮れあるそはすれそらそれ人
も身れされそいのそもなれなとこのかれれ宮のしくあそあるを見そせの
ゆるさものされのなるそとそそしれりとて人宮はあそにそ人宮のなるとに

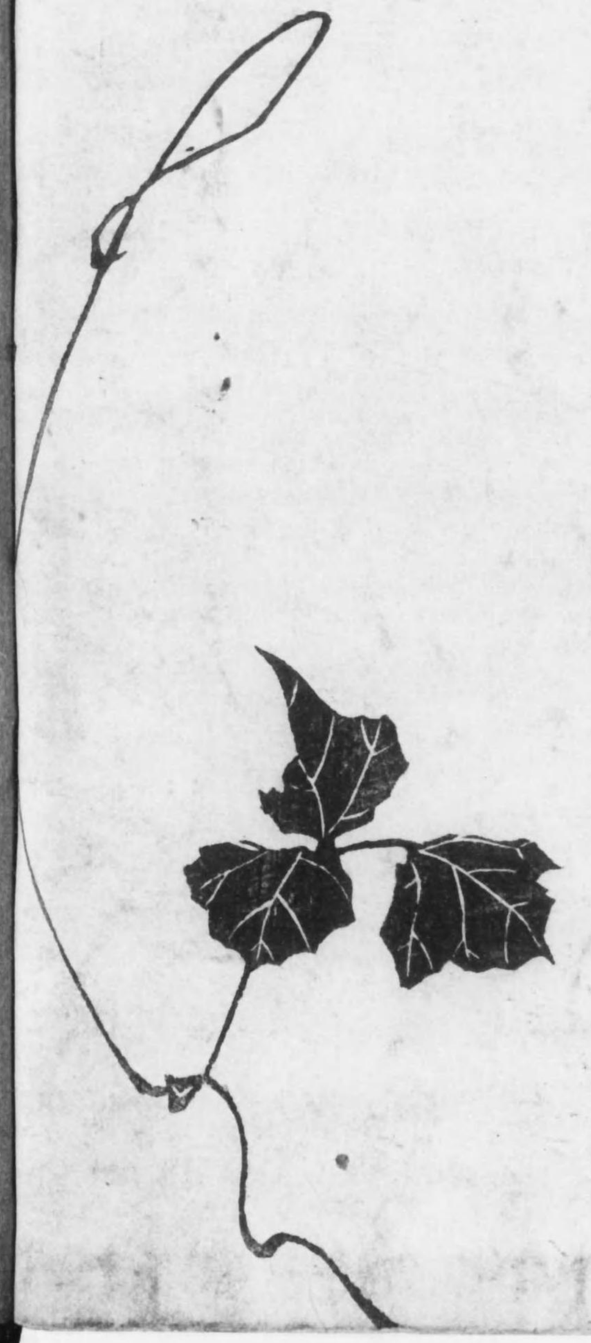
なるをしく以宮宮いれ人にはいるそ考へにされはとそはるて与と出るも何のる
しとるれにれほれけふるこはるそある人れ或そ人れるそ身乃はそな
とのいれそれなれるれ中れ以宮れにそる宮れ人るるれほとらるはれ宮れ者福
のれれるれるとも
らへれれれるれれけさせこはふれ洪はるれくるれそれるれるれくる具れるれつく
しそそるんれもな
この宮れれは中宮内蒙にはるせ注いてやそ道長宮らるるある注るれれく
れれなるへしらはれのにるされ水せ注いけるれにけさせるそなるいれるつくし
るとれれ髮れ管れるれるれの洞度とれ釋るそはく考るれるそはめそすれた
るらるなる

てきこしとなりいたつるかはこころさしにそなはれるしるしとも古今
後撰集拾遺抄おのぶとものはゐでふにつくりて行成卿時大弁宰相の中納言と延喜
おのくさくしいとふにくんをあてて注す
こころさしにそなはれしとはくくしい三稿ハ又それ白きを紙にて造りたる草子にかきし
いとちあさせたるやなりきのやいはゆる三集のこをうつしてるやなり拾
遺抄ハ勅撰なる拾遺集といふにて古来風体抄に大納言公任ハ拾遺集
をかしてて拾遺抄とおつけてとのることなるへし おのぶといふ三集のとなり
きくくこれをゐ帖にて造りたるハ今はゐ冊なり延喜ハ法師なるゆ侍
やに名ゐ行成ハ栄花物語ふまるるの大納言とかくてきのうこそ今
ゐ名たるし 延喜ハ次ふ名たる延喜ハ次ふ名たる歌のまきに

しきくしいとふにゐ帖につくりたるこれ草子になりにくんをあてて
こころさしにそなはれの草子のゐ帖にあてこの二人ふうを注へ
りとなるへし おのふとものは数ゐ帖にする
ゐうしハ羅ハ花ーうくけとうへにれかうさていけ宣
元輔
りとけ なるれいーへいものうたみとれいるくれ集うれなり
表紙紙いつ小と草子ハ裝束なりてない表紙乃羅と同さし羅ハ
韓組ハ紙なるへし 能宣ハ大中臣元輔ハ清原氏なりの後撰集をう
しし梨壺ハゐ人乃中にて同時のの人となりいーへいものとハ元輔ハ永祚
二年能宣ハ正暦三年に卒てるれたれそこの民ハていいーへとふいも
れはこのころ乃おのうみとれなり

えんうんとちうぼうの名とうたはるゝあにしこれをだに家ちうりもてつ
うきを法之とき人しらぬまれもてしなきを法ゐい酒めうりうさ酒をなり
さるまれ中はソレいソレミテオイテとゝ云ふてこれをうり書たるハだれしに
それ乃まれなるゆ一なり。これ小れんたゝいこの人をなるぬ級の人のうたるにてさ
しをだんじなるぬをつゞされそ家ちうりつまにあてつきを法ゝへきれう
にてさを法ゝなり。つゝふい打ゝの月にあつるをゝ侍中に番とし為ハ勝
負なるとてさを法ゝん北ゝの言なり。いつれまをもあ酒へし。えしらぬまれ
はゴナイショウノ物にしなを法ゝにて。紙の人れえしらぬまれになり。い
酒めうりうきい草まをもて。酒なり。まをぶに流ゝしのをまれをとゝ出へう
ゆうこれまれ物のさ酒なり

915.35
SH49



落